

新出の独尊勢至菩薩像について

植村 拓哉

はじめに

浄土宗においては、元祖たる法然房源空上人「一一三三―一二一二」を勢至菩薩の化身とする信仰を育んできた。それは法然往生の後、勢観房源智によって文暦年間（一二三四―三五）頃に建立された現知恩院勢至堂及び同堂本尊勢至菩薩坐像をはじめとして、金戒光明寺、知恩寺、清浄華院の京都の四箇本山にはそれぞれ勢至堂が営まれていたことが知られ、その本尊として知恩院像を根本とした模刻像が制作されたことが指摘されている。^{（1）}このことから浄土宗において長く一定の信仰を集めていたことが窺われる。しかしながら、このような勢至菩薩の化身とされた法然に対する祖師信仰については従来詳しく論じられることはなく、その全容や信仰の及ぶ範囲については未だ課題が残されていると考える。

このような問題に取り組むなか、調査の過程で従来知られていた四箇本山像以外に法然本地身として制作され

たと考えられる新出の独尊勢至菩薩像二例が新たに見出された。

ここでは、新出作例の紹介を行うとともに、各種法然伝および浄土宗内外の僧侶の著作などから「法然本地説」を抽出する。それによって、同信仰をめぐる美術作例が生みだされてきた背景的要素について基礎的な知見を得たい。

一、法然院勢至菩薩坐像について

―― 法然院について

法然院は善気山万無教寺と号す京都市左京区に所在する単立寺院である。法然が鹿ヶ谷において営んだ草庵に端を発し、往生の後は衰退するが、延宝八年(一六八〇)には知恩院第三八世玄譽萬上人の発願によって念仏道場が建立され、その弟子忍激上人の中興により現在の伽藍が整えられたという⁽²⁾。不断念仏、六時礼讃、持戒清淨の念仏道場として興隆した寺院として著名である。

同院本堂向かって左檀中央には、「厨子入り法然上人像(頭光踏蓮御影)」⁽³⁾が安置され、その左側厨子内に勢至菩薩坐像「図1」が安置されている。後述のように一見して近世における平安後期頃の模古作と見られるが、一尺程度の小品ながら端正な像容をみせ、彫刻としても優れた出来栄をみせる。

まず、法然院像の基礎的情報について確認していこう。



図1-2. 左側面



図1-1. 勢至菩薩坐像 法然院



図1-4. 像底



図1-3. 背面

一―二、法然院勢至菩薩坐像の概要⁽⁴⁾

木造 勢至菩薩坐像 一木造 布貼泥下地 漆箔 彫眼 一軀 江戸時代(一八世紀頃か)

〔形状〕

合掌し右足を上にして結跏趺坐する勢至菩薩像である。髻は頂部で束ね一房をつくり、五房にわけて垂れる。地髪部には細やかな毛筋彫りを施すが彫りは均一ではなく、後頭部では毛流れに乱れや深淺さが見て取れる。天冠台は紐二条の上に列弁を配す。白毫相、三道相をあらわす。著衣は上から天衣、条帛、腰布、裙を着す。両肩にかかる天衣は、ともに上膊に沿い背面の両脚部付根辺りの地付きに垂下する。条帛は左肩から右脇腹にかけてまとう。下半身は折り返しをつけた裙を着け、その上に腰布を重ねる。

〔法量〕

総 高 五九・五(宝冠・台座含)

像 高 三三・〇

髪際高 二四・九

頂―顎 一一・七 面 長 五・八

面 幅 五・三 面 奥 七・〇

耳 張 六・九 胸 奥 (左)六・〇 (右)六・三

肘 張 一四・七 腹 奥 八・四

坐 奥 一四・六 膝 張 二一・四

膝 高 (左)四・五 (右)四・七

台 座 二五・四

〔品質構造〕

厚手の表面仕上げが施され、また像底に底板があることによつて構造の詳細が読み取りづらい。しかしながら像底から見るかぎり、両脚部を含む一材より彫成される。白毫は木製別材製。頭部地付部正面に柄穴があり、現状欠失しているものの恐らく別材製の宝瓶を柄差ししていたものと考えられる。金銅製の宝冠は前頭部二ヶ所、後頭部二ヶ所に釘打ちにて天冠台部分で留める。金銅製胸飾。両天衣先欠失。

一―三、造形的特徴について

まず法然院像について考えるにあたっては、それが果たして法然本地身たる勢至菩薩として独尊で制作された作例か否かという問題が挙げられるだろう。阿弥陀三尊の脇侍菩薩であつた可能性も留置されるためである。これは制作当初、あるいは院内における信仰史について語る資料の存在が不可欠といえるが、現状、法然院像に関してはそれにあたる資料には恵まれていない。

しかしながら、中世以降の阿弥陀三尊作例を概観してみると、圧倒的に立像形式をとるものが多いことに気付かれる。加えて、法然院の寺格と性格、安置状況を勘案すると、法然本地身としての勢至菩薩として造立された蓋然性は高いものと考えられる。



図2. 厨子入法然上人立像（頭光踏蓮御影）法然院

院像が法然本地身たる勢至菩薩を意図して制作されたものと考えたい。

次に造形的特徴の興味深い点についても触れておく。

小品の作品で、厚手の表面仕上げが施されているという前提を考慮すべきではあるものの、印象的な点として比較的痩身で肉身の抑揚や起伏をことさらに表さず、著衣の衣文も穏やかで浅く数少ない点が挙げられるだろう。一見して平安後期様式との近似性が看取される。面貌表現では、眉目が浅く彫りだされ、眼にいたっては浅い彫りに厚手の表面仕上げが施されることによって明瞭さに欠ける。この点、表面仕上げが後補の可能性が出て来る

安置状況については、四箇本山像のうち、知恩院像は当初「（法然）御廟の傍ら」に安置すべく制作されたことが知られる。他本山は勢至菩薩像と彫像の法然御影が同堂内に安置されていたことが窺われる。⁽⁵⁾ 御影とともに安置する形式が生まれた背景として、知恩院における安置状況の疑似的な再現を企図した可能性が高いと考える。法然院像の制作年代の確定は困難と言わざるを得ないが、先にも触れたようにその傍らには「頭光踏蓮」の奇瑞を造形化した法然上人像「図2」が安置されている。彫像で同場面を描写したものは類例がなく極めて珍しい。⁽⁶⁾ 法然上人像は法然院像と共通する厚手の泥下地の仕上げが施されており、私見では江戸時代後期頃のほぼ同時期の制作になるものと考えている。このことから、法然



図3 不動明王坐像 常禅寺



図4. 千手観音坐像 峰定寺

ものの、法然院像ではそれが制作年代を遡らせる要因とはならないと考えている。

また、両脚部の衣文線も膝前から足首にわたる弧線を作る形式をとらず、また複雑に波打ち著衣の重なりを強調する表現もとらず、上から下へいくに従い自然に立ち上がり細く深く撓む襞を造っている。これは例えば、福井・常禅寺不動明王坐像〔図3〕や京都・峰定寺千手観音坐像〔図4〕などに見られる院政期あたりの形式を企図したようにも見て取れる。しかしながらその技量や表現的な差異は明らかといえるだろう。

独尊勢至菩薩像に平安後期的な様式を採用した背景については現状不明と言わざるを得ないが、同要素が本稿

で検討する独尊勢至菩薩に対する信仰に関わりを持つとは考えてはいない。法然院本尊阿弥陀如来坐像も平安後期様式を企図した模古作であり、あくまでも推測に留まるが、様式の統一が図られた可能性は考慮される。ともあれ、この点については、独尊勢至菩薩像に関してさらなる調査を進めるなかで自ずから明らかとなるものと期待している。

構造面では像底地付部に底板をはり、布貼りを施している。底板の中央部分に台座蓮肉部の凸状の突起に差し込むように凹柄を設けている点も近世作例に多々見受けられる処置といえる。

これらの点から、法然院像は江戸時代後期頃に「頭光踏蓮」の場面を造形化した法然上人像と共に造立されたその本地身たる勢至菩薩像であるものと考えたい。

二、如来院ゆり上橋杭勢至菩薩坐像について

二―一、如来院について

如来院は、珠光山遍照寺と号す兵庫県尼崎市に所在する浄土宗寺院である。法然上人二十五霊場の第四番としても知られている。聖武天皇の勅願による行基の四十九院のひとつとして天平年中に遍照寺が開基されたという。その後、いわゆる「建永の法難」による法然讃岐配流の途次に、神崎の地で五人の遊女を教化し、その遊女たちが入水往生を遂げ、法然は遍照寺において廻向した。また帰路においても三日間の念仏を修したと伝わる。例えば『法然上人行状絵図』卷三十四第五段に描かれる場面がそれにあたる。

そして、その法然伝所収の逸話を象徴するかのような作例として注目されるのが、ここで取り上げるゆり上橋



図5-2. 勢至菩薩坐像



図5-1. ゆり上橋杭勢至菩薩坐像 如来院



図5-4. 背 面



図5-3. 左 側 面

杭勢至菩薩坐像⁽⁷⁾「図5」である。まずその概要について見ていきたい。

二―二、如来院ゆり上橋杭勢至菩薩坐像の概要⁽⁸⁾

木造 勢至菩薩坐像 一木造 素地 彫眼 一軀 江戸時代(一八世紀)

〔形状〕

胸前で合掌し右足を上にして結跏趺坐する勢至菩薩像である。水面上に起てられた橋杭の上の蓮華座に坐す。丈の高い髻を造り、毛束を六つに分けて垂らす。髻を平彫りに、地髪部を毛筋彫りとする。白毫相、三道を表す。耳朵環状。両手を屈臂し胸元で合掌する。腕釧をつける。著衣は上から天衣、条帛、腰布、裙を着す。天衣は両肩を覆い腕に沿って前面に垂らし、両肘の後ろで輪を作り再び下膊に渡る。そして両脚部から地付き部に至る。

〔法量〕

総 高 七四・〇(光背・台座含)

像 高 三九・九

髪際高 三〇・〇

頂―顎 一〇・八 面 長 五・八

面 幅 五・八 面 奥 六・八

耳張	六・六	胸奥	(左)七・一 (右)七・二
肘張	一五・八	腹奥	一〇・七
坐奥	一六・五	膝張	二一・三
膝高	(左)五・〇 (右)四・九		
台座	(径)三三・二		

〔品質構造〕

両肩を含む頭体幹部通して一材から彫成され、両臂及び下膊半ばで合掌する両手先を矧ぎつける。両脚部は横一材製。内刳りなし。天衣は左右ともに脇下を通り、遊離部及び下膊より垂れる部分で別材矧ぎとしている。金銅製頭飾・胸飾を着ける。眼を墨で、黒目の輪郭に朱を、白目に白土、唇に朱を施すほかに彩色が施されない素木像である。しかし、後頭部毛筋彫り箇所の一部白土が見られることから頭髪にも彩色を行っていた可能性がある。光背は台座に柄で差込まれ、現状取外しが出来ない。台座はその下にある杭と共木で彫出される。本体と台座は接着固定され、取り外しできない。

二―三、関連資料及び制作年代について

まず、同院に遺された資料群から如来院像についての基礎的な知見を得たい。

近世以降、同院が法然上人二十五霊場のひとつとして信仰を集めてきたことは先に触れたが、『円光大師御遺跡二十五箇所案内記』『明和二年(一七六五)頃』を参照すると、

第四番〈撰州尼崎／てら町〉〈珠光山／遍照寺〉如来院

御多い歌に身と口とこころの外の弥陀なれば、われをはなれて、となえこそすれ

此寺は、いにしえは同国神さきにありては、行基ぼさつの開基、聖武天皇のちよくぐわん、四十九院の内、本尊は土塑の釈迦如来なりしが、第八世空禅上人の時、こうずいにてそんぞうは多し給う、是によって、善光寺如来を模写して本尊とせり、(中略)此如来院にはれいほうあまたあり、長柄の橋杭にて作りし勢至菩薩一軀あり、是大師の御本地なるゆえ湛空坊てうこくのよし、

※ 傍線、() 内筆者注、〈 〉 内割注、／ 改行を示す。以下同。

とある。

また、同院に関する資料群については、梅溪昇氏が翻刻し紹介されている。⁽⁹⁾ その中の『新古什物帳』[明和四年(一七六七)]に「一 橋杭勢至菩薩一軀」とあり、『如来院靈宝控 当山略縁起等』[文久年間(一八六一—一八九)頃か]には、「十八独勢至坐像〈游上橋杭二而／彫刻湛空上人作〉同(厨子入壺本)」とあるものにあたると考えられる。ここで勢至菩薩が「独」とことさらに付されている点は、その背景を想定させるに十分である。

さらに、同院に関する資料として、『珠光山遍照寺如来院縁起(題箋には『当寺略縁起』とある)』[元禄一〇年(一六九七)頃か]及び『撰州神崎遍照寺如来院之夏(題箋には『古縁起』とある)』[「年次不明」と記される卷子が伝来し、さらに、享保七年(一七二二)三月に行われた「靈仏什宝」の御開帳に伴い記された『撰州／尼崎／如来院縁起』[「享保七年」がすでに紹介されている。⁽¹⁰⁾ これらの資料では、院内の安置仏を挙げながらも如来院像に関する記述は見受けられない点は留意される。法然による遊女教化という法然にゆかりの同院が、「靈仏什宝」

として如来院像を取り上げないとは考えにくい。

この点で極めて興味深いのは、前述の享保七年版『如来院縁起』の「霊仏什宝」の中に、

一 神崎洵上橋の遺株 五人の傾城上人の教化をかうむる事縁起あり、五人の傾城名寄の歌吾妻路や見やきか原の露かるも月の小倉やうたの大人

と記されていることである。「神崎洵上橋の遺株」とは、その後の解説にある通り五人遊女に関連する遺物であることは疑いなく、まさに如来院像の蓮華座下にそびえる「ゆり上橋杭」に他ならないと考える。つまり享保七

年の段階では、未だ勢至菩薩像が造立されていなかったと考えることが自然であろう。

またこれに関連して注目されるのは、如来院像の面部左頬〔図5-5〕をはじめ、額部分や背面左肩にかかる天衣などに木の節が見受けられる点である。通常、仏菩薩を制作する用材に節の目立つものを使用することは考えにくく、ましてや面部にそれが現れることは避けるであろう。しかしながら、いわゆる「霊木化現仏」として位置づけられる数多くの作例に同様の事例が見受けられることが知られている。霊木化現仏とは、



図5-5. 頭部正面

井上正氏の提唱にかかるもので、神の依り代たる霊木(神木)に仏が現れた様を捉え表したものであり、霊木から仏が現れてくる様を具象的に表現するために鑿痕を部分的、あるいは全面に意図的に残している。その霊木の威容を損ねないためにも素木あるは用材として珍重された檀木(黄檀・赤梅檀)の色を模した淡い彩色や眼・髭などに墨を施すにとどめる場合が多い⁽¹¹⁾。また、その木がもつゆがみや節なども尊重し残すなどの特徴が見受けられる⁽¹²⁾。この点で、現状勢至菩薩像は杭とは別材で制作されているが、もとはひとつの同じ用材であった事を示していると考えられる。まさに法然教化によって五人遊女が入水往生を遂げるという尊い宗教体験が行われた橋の欄干に、法然本地身たる勢至菩薩が現れ極楽へ引接する様が描写されているように捉えることができるだろう。

これまでの検討によって如来院像の制作年代は、未だ「遺株」であった享保七年(一七二二)を上限とし、勢至菩薩像が造立されていたことを示す資料上の初出である『円光大師御遺跡二十五箇所案内記』が刊行された明和二年(一七六五)を下限とするものであることが指摘できる。基準作の調査を経たうえで比較検討を行うべきではあるものの、様式的にも一八世紀頃の作とみて矛盾しないものと考えられる。

三、法然伝における「法然本地説」について

さて、これまで述べてきたように、浄土宗における法然本地身としての勢至菩薩に対する信仰によって、独尊の勢至菩薩像が制作されてきたことは疑いないであろう。そしてその信仰は、取りも直さず浄土宗元祖たる法然に対する祖師信仰が基盤となっていることはあらためて述べるまでもない。

同信仰を保持し続け、新たな作例を生み続けた背景を考えたとき、最も重要な要素として位置づけられるのが、

現代にいたるまで編まれ続けてきた法然伝である。

法然伝とは、法然の逸話を集成したものを総称し、詞書と絵を併せて集録したものを特に法然絵伝と称している。法然伝はその没後二〇年頃までに編纂されたと考えられる醍醐本『法然上人伝記』を皮切りに、次々に編まれていった様相を見ることが⁽¹³⁾できる。

各種法然伝については極めて膨大な研究史があるが、本稿の主題である法然本地身としての勢至菩薩について⁽¹⁴⁾検討した研究は決して多くない。特に注目されるのは、勢至菩薩について論じるなかで、『首楞嚴經』「勢至円通文」に着目し、勢至菩薩の因地が念仏にあり、念仏によって衆生を浄土に帰せしむとすることから専修念仏を説いた法然との関連を指摘した河波昌氏の研究は極めて重要なものとして挙げられる。⁽¹⁵⁾また、法然伝に表される善導を阿弥陀の化身、法然を勢至化身とする対比的な位置づけに着目され、その信仰が法然伝の編纂を重ねることで浄土宗の師資相承を明確化し、以降の浄土宗の確立に寄与したとする大谷旭雄氏の論がある。⁽¹⁶⁾近年では、東海林良昌氏が『法然上人行状絵図』における対外觀を視点に、同絵図は「法然勢至応現説を基調として編纂」されたものとして位置付けられた。⁽¹⁷⁾続けて東海林氏は、「四十八巻伝以前の伝記では、対外觀を前提として相対的に日本における優れた人物としての祖師の価値を想定」していたことを指摘する。つまり同絵伝の序文に着目すれば、「釈迦の生涯→仏法東漸→聖道門・浄土門→善導弥陀化身・法然勢至応現」という文脈から、「法然は勢至菩薩の応現の化導であるからこそ、称名念仏が日本で盛んになるという絶対的な価値づけがなされ」、「時機相応の称名念仏の教行を広めた、異国に比べても劣らない優れた日本の祖師の相対的な価値を積極的に説こうと」したものであるとする。法然を「仏格としての祖師」として説かれていることを述べている点で注目される。

各種法然伝のなかでも『行状絵図』が占める重要性は述べるまでもないが、法然伝自体は引用と追加(あるいは

は創出)を重ねて編み続けられてきた。当然逸話としての重複が見られるものの、その比較を通してそれぞれの依拠資料の推定が重ねられている。⁽¹⁸⁾しかしながら、これまで勢至化身たる法然について述べる箇所をまとめて通覧されたことはなかったものと考ええる。そこで本研究に対する基礎的作業として、新出の勢至菩薩像が制作される基層を把握すべく法然伝に記された「法然本地説」について語る箇所を示した一覧表を最後に付した。あくまでも現段階までに収集したものであり、決して網羅できているとは言えないが、一〇〇余りを見出している。

最古の法然伝と指摘される醍醐本『法然上人伝記 附一期物語』に見られる(一)「公胤夢告」及び最古の法然絵伝である『本朝祖師伝記絵詞』の(二)「靈山寺行道」、(三)「公胤夢告」が最初期の勢至化身としての法然を描いており、以降、様々な同様の意図を示す逸話が加えられ、それぞれ少しずつ著色、肉付けを施しながら近代の寺誌編纂に至るまで採用され続けた過程を窺うことができる。特に「公胤夢告」は、極めて早期から連綿と語り継がれてきたものといえる。従来あまり取り上げられることなく穏やかに営み続けられてきた信仰が、元祖法然を語るうえでいかに重要視されて来た要素であるかを如実にみることができる。同信仰の喧伝を各種法然伝が担ってきた様相を如実に伺うことができる。

また、この一覧では、勢至菩薩のみならず法然本地説として触れるものについても取り上げている。「勢至菩薩のほかにあるいは」という挙げ方が多いが、例えば阿弥陀や善導の化身とするものが比較的早期に見いだされる。このような点は、浄土宗における師資相承にも関わり語られてきた背景が想定され興味深い。本稿では資料提示にとどまるが、別稿にて総合的に検討したい。

おわりに

これまで、法然の本地身として制作されたと考えられる独尊勢至菩薩坐像の新たな二作例の紹介を行った。さらに、各種法然伝において語られた「法然本地説」について抽出し概観してきた。

特に、これまで四箇本山像のみが知られていたなかで、新たな作例を二例加えられたことは重要であると考ええる。そして、この独尊勢至菩薩像が生みだされ信仰されてきた背景に、浄土宗としての仏教美術に対するアプローチが垣間見えるように考えられる。つまり法然自身も祖師への恩徳を語っているように、子弟たちも元祖たる法然に対する祖師への報恩を表すために生みだされていったもののひとつの形であったのではないだろうか。

また、同信仰が培われてきた基層として注目される各種法然伝における、法然本地身としての勢至菩薩に関する記述を、研究の基礎作業として抄出し一覧にした。生前における資料からは法然本地勢至説について見出されていないが、特に没後早い時期から編まれ始めた法然伝から近代に至るまで連綿と語り継がれていることをまざまざと見ることができる。

独尊勢至菩薩像についてはその存在について、未だ作例の搜索が不十分と言わざるをえない。全容を把握するためには、全国的で網羅的な調査を踏まえた検討が必要となってくる。しかし、それによってこそ浄土宗が独自に展開した信仰に基づく仏教美術の成立の様相が明らかになるものと考えており、今後注視しながら課題に取り組みたい。

キーワード…法然、勢至菩薩、法然伝、祖師信仰、浄土宗美術

〈注〉

- (1) 京都四箇本山における勢至菩薩坐像については、村上佳濃氏による論考に紹介されている。村上佳濃「法然教団における勢至菩薩像について」(『美術史研究』四七、早稲田大学美術史学会、二〇〇九)
- (2) 『浄土宗全書』巻一八一―一七頁
『東山獅谷法然院誌』(法然院、一九一五)
- (3) 法然院藏法然上人像については、『法然上人の御影』(特別展図録、佛教大学宗教文化ミュージアム、二〇一四)参照。
- (4) 調査は二〇一六年七月一五日に、熊谷貴史(佛教大学総合研究所特別研究員)及び柿本雅美(本館学芸員)とともに行った。
- (5) 例えば、金戒光明寺では勢至菩薩像が法然の御廟である石造五輪塔の上に安置され、また同堂内に涅槃像形式の法然像が安置されていたという。また知恩寺でも、勢至堂安置で合掌坐像形式をとる法然上人坐像が伝来する。
『宝物総覧』(浄土宗大本山くろ谷金戒光明寺、二〇一一)
- 『京都社寺調査報告二七 知恩寺』(京都国立博物館、二〇一六)
- (6) 佛教大学紫野キャンパスには、本像をモチーフとして平成二年(一九九〇)に開眼供養された法然上人像があるが、ここでは省いて考えたい。
- (7) 名称は寺伝による。
- (8) 調査は二〇一六年七月一二日に、柿本雅美とともに行った。
- (9) 梅溪昇『法然上人遺跡 如来院の来歴と史料』(思文閣出版、二〇一一)
- (10) 前掲注7『如来院の来歴と史料』
- (11) 檀木の色を模したいわゆる「檀色」については、『河内国観心寺縁起資財帳』に唯一の記載があり、実際にどのような

技法であるのかが不明であった。しかし、井上正氏は日本における代用檀像の展開の中で、白檀のなかでも上等なものである黄檀・赤梅檀の色を模すことを企図した作例が「檀色」像であることを明快に説かれている。

井上正「檀色」の意義と楊柳寺観音菩薩像」(『学叢』三、一九八二)

(12) 鑿痕を残す事例については、久野健氏によって、いわゆる「鈍彫り」仏と称され、当時東国を中心とした作例を主として取り上げられていたことから、東国における荒々しい氣質がそのような荒々しい表現を好んだというように解されてきた。従来、そのような粗野な造形として「地方仏」や「素人作」として評価されてきた作例群に対して、井上正氏は全国的で網羅的な調査を経たうえで「霊木化現仏」として再評価を行い、日本における木彫観の再検討を促している。

久野健『鈍彫』(六興出版、一九七六)

井上正『古仏』(法蔵館、一九八六)

同『続古仏』(法蔵館、二〇二二)

(13) 近代における法然伝について、例えば、「法然本地諸説一覽」中、(一〇七)知恩院『華頂誌要 華頂山篇』や(一一一)金戒光明寺『黒谷光明寺誌要 黒谷篇』などの寺史編纂の中で祖師の略伝が編まれたことも、ここでは新たな編纂として加えておきたい。また、浄土宗無量光寺小川龍彦の発願によって、芹沢銈介が制作した『法然上人絵伝』(一九四一)は近代における代表作例といえるだろう。またこれに関連して、近代以降、研究を目的とした、より厳密な校訂が行われたことも特筆すべきであろう。大正一三年(一九二四)に藤堂祐範・江藤澂英によって、知恩院本・奥院本・翼賛本とを校合した『大正新校 法然上人行状絵図』の出版をはじめとして、現在では現代語訳版、英訳版などの出版も行われていることも留意しておきたい。

(14) 本稿では特に以下を参照した。

田村円澄『法然上人伝の研究』(法蔵館、一九五六)

井川定慶『法然上人絵伝の研究』(法然上人伝全集刊行会、一九五九)

三田全信『成立史的法然上人諸伝の研究』(光念寺出版部、一九六六)

中井真孝『新訂 法然上人絵伝』(思文閣出版、二〇一二)

(15)河波昌「勢至菩薩」(金岡秀友編『大乘菩薩の世界』、佼成出版社、一九八八)

同「浄土教における威(神)論の展開―附 勢至菩薩論考―」『浄土宗学研究』一七、一九九二

(16)大谷旭雄「弥陀化身善導と勢至化身法然の信仰―『九卷伝』『四十八卷伝』を中心に―」(『法然浄土教の総合的研究』、一九八四)

(17)東海林良昌「中世法然伝における対外觀」(『仏教学会紀要』二二、佛教大学仏教学会、二〇一六)

(18)前掲注17『法然上人伝の研究』、『法然上人絵伝の研究』、『法然上人伝の成立史的研究』、『成立史的法然上人諸伝の研究』など。

〔付記〕

調査にあたっては、法然院梶田真章上人、如来院久松宏明上人に快諾を頂き、格別のご配慮を賜りました。また、本稿を成すにあたって、安藤佳香先生(佛教大歴史学部)、松永知海先生(同大仏教学部)には、折に触れご教示を賜りました。末筆ながら記して深甚の謝意を表します。

〔図版出典〕 ※ 本稿で掲載した図版は、左記資料より転載させて頂いた。その他は筆者撮影による。

図2…『法然上人の御影』(特別展図録、佛教大学宗教文化ミュージアム、二〇一四)

図3・4…『院政期の仏像』(京都国立博物館、一九九二)

新出の独尊勢至菩薩像について(植村 拓哉)

「法然本地諸説一覽」

番号	成立	著者	書名	箇所	内容	出典
一	成立年次不詳	撰者不詳	法然上人伝記附 一期物語(醍醐 本)	別伝記	公胤夢見て云く、「源空本地身、大勢至菩薩、衆生教化故、来此界度々」云々	法伝全七八八
二	嘉禎三年 (一一三三— 一一三七)	耽空 (一一七六—一二 五三)	本朝祖師伝記絵 詞(四卷伝)	卷第二	靈山寺にて三七日不断念仏間、灯なくして光明あり、第五夜におのおの行道、まじわりて、勢至菩薩、同列にたち給える事を、ある人夢の如く拝して、上人にこのよしを申、さる事侍らん、返答、 建保四年丙子四月二十六日夜夢に、聖人告云、「往生之業中 一日六時刻 一心不乱念(中略)源空本地身 大勢至菩薩 衆生為化故 来此界度々」	浄全一七一六三 法伝全四七九
三	嘉禎三年 (一一三三— 一一三七)	耽空 (一一七六—一二 五三)	本朝祖師伝記絵 詞(四卷伝)	卷第四	仍南都北嶺碩徳、みな上人の教訓にしたがい、花洛砂塞の緇素あまねく念仏の一行に帰す、この故に世こぞりて智慧第一の法然得大勢至の化身とぞ申しける上人誕生のはじめより遷化の後に至るまで絵をつくりて九巻とす	浄全一七一七八 法伝全四九八
四	仁治二—弘長二年 (一一四一—一一六二) 頃か	琳阿 (一一四〇頃)	法然上人伝絵詞 (琳阿本)	卷一第一段	靈山にて三七日不断念仏のあいだ燭なくして光明あり第五の夜各行道し給にまじわりて大勢至菩薩つらなりてたち給える事ある人夢の如くに拝して上人に此よしを申にさる事侍むと返答あり是より始めて人々恠をなしはべりき	浄全一七一—二四二 法伝全五四四
五	仁治二—弘長二年 (一一四一—一一六二) 頃か	琳阿 (一一四〇頃)	法然上人伝絵詞 (琳阿本)	卷四第五段	その夜の夢に上人公胤に告て云、「往生業中一日六時刻一心不乱念功験最第一六字称名者往生必決定雑善不決定専修決定善源空為孝養公胤能説法成善不可尽臨終先迎接源空本地身大勢至菩薩衆生教化故来此界度々」	浄全一七一—二五五 法伝全五五七
六	仁治二—弘長二年 (一一四一—一一六二) 頃か	琳阿 (一一四〇頃)	法然上人伝絵詞 (琳阿本)	卷八第八段		浄全一七一—二七八

二一	一〇	九	八	七
建長七 (一一二五)	建長年間 (一一四九―五六)	建長年間 (一一四九―五六)	建長二 (一一五〇)頃	仁治二―弘長二年 (一一四一―六二) 頃か
日蓮 (一一三二―八二)	橘成季 (生没年不詳、一 三世紀頃)	橘成季 (生没年不詳、一 三世紀頃)	親鸞 (一一七三―一二 六二)	琳阿 (一四〇頃)
念仏無間地獄鈔	古今著聞集	古今著聞集	浄土和讃	法然上人伝絵詞 (琳阿本)
	釈教六三	釈教六三	勢至讃	卷九第六段
<p>(前略)誰人か現身に光を放や是則かしこに弥陀の智用をみがき勢至菩薩とここに勢至をほめて無辺光と申す智恵の光をもちて一切を照か故也上人を譽るに智恵第一と称す碩徳の用をもちて七道をうるおす故也弥陀は勢至に勅して済度の使いとし善導は上人を遣して順縁の機をととのえ給えり</p> <p>首楞嚴經によりて大勢至菩薩和讃したてまつる(中略)念仏の人を撰取して浄土に帰せしむるなり、大勢至菩薩の太恩ふかく報ずべし、已上大勢至菩薩、源空聖人御本地なり</p> <p>源空上人は一向専修の人なり、ただ人にはおわせざりけり、弥陀如来の化身とも申、勢至等の垂迹とも申すとぞ、其証あきらかなり、(後略)</p> <p>(前略)三井寺の公胤僧正、結縁のために四十九日の導師を望て、両界曼陀羅並に阿弥陀の像を供養してけり、其後五ヶ年を経、建保四年四月二十六日の夜、僧正の夢に見侍りける、上人告云、「往生之業中一日六時節 一心不乱念 功德最第一 六時称名者 往生必決定 雑善不決定 高修定善業 源空初孝養 公胤能說法 歡喜不可尽 臨終先迎接 源空本地身 大勢至菩薩 衆生為化故 来此界度者」書く示してさり給いにけり、勢至菩薩の化身という事これにより符合する所なり</p> <p>日本国には法然上人浄土宗の高祖なり、(中略)一天の貴賤首を傾け四浦の道俗掌を合せ、或は勢至の化身と号し、或は善導の再誕なりと仰ぎ、一天四海になびかぬ木草なし、(中略)道俗、男女悉く法然房を以て生身の弥陀と仰ぐ、(後略)</p>				
法伝全九七七	法伝全九八一	法伝全九八〇	原	浄全一七―二八一

新出の独尊勢至菩薩像について(植村 拓哉)

一七	一六	一五	一四	二三	一二
正嘉一 (一二二五七)	康元二 (一二二五六)以前か	康元二 (一二二五六)以前か	康元二 (一二二五六)以前か	康元二 (一二二五六)以前か	康元二 (一二二五六)以前か
住信 (生没年不詳)	撰者不詳	撰者不詳	撰者不詳	撰者不詳	撰者不詳
私聚百因集	源空聖人私日記 (西方指南抄本)	源空聖人私日記 (西方指南抄本)	源空聖人私日記 (西方指南抄本)	源空聖人私日記 (西方指南抄本)	源空聖人私日記 (西方指南抄本)
卷八第六話					
抑本朝源空上人は、往生極樂勸進大念仏三昧弘通先達なり、(中略)三七日云、丑時異香室に満ち、三七日子時光明朗にして人目に驚く、音楽耳に聞え称名音に加る試に灯明を消し然と雖も道場明々たり、上人本地勢至菩薩云事其念仏中に顕たり(後略)	夫以、俗姓は美作国庁官漆間時国の息、(中略)長承二年癸丑聖人始て胎内より出の時、両原天より降る、奇異の瑞相なり、権化の再誕なり(後略) (前略)その時聖人、浄土宗義念仏功德、弥陀本願の旨、明々之を説く、(中略)形を見れば源空聖人、実には弥陀如来応跡かと定めた 又、靈山寺三七日不断念仏の間、灯明無くして光明あり、第五夜勢至菩薩行道し同列に立給う、或人夢の如く之を拝し奉る、聖人曰く、猿こと侍る覧と、余人は更に拝見すること能わず、 月輪禪定殿下兼実御法名円照、帰依甚だ深なり、或日聖人、月輪殿に参上し、退出の時地上より高く蓮華を踏み歩み、頭光赫奕、凡そ勢至菩薩化身也、 園城寺長吏法務僧正公胤法事のため唱導の時、其夜の夢告に云う、源空教益のため、公胤に説法を能う、感即ち尽くすべからず、「臨終先迎接、源空本地身大勢至菩薩、衆生教化故来、此界度度」、此故勢至来見し、大師聖人と名づく、所以勢至を讃じて言く、「無辺光以智恵光普照一切、故嘆聖人称智恵第一、以碩徳之用潤七道故也」、弥陀勢至を動し済度の使いとなし、善導聖人を遣わし順縁の機を整えたり(後略)				
法伝全九八四	浄全一七七八 法伝全七七二	浄全一七八七・ 八八 法伝全七七一	浄全一七八七 法伝全七七一	浄全一七八七 法伝全七七一	浄全一七八五 法伝全七六九

二二	二〇	一九	一八
弘長三 (一二二六三)	文永一 (一二二六〇)	正元一 (一二二五九)	正嘉一 (一二二五七)
恵信尼 (一二二八二―一二二六八)	日蓮 (一二二二一―八二)	日蓮 (一二二二一―八二)	住信 (生没年不詳)
恵信尼消息	立正安国論	守護国家論	私聚百因集
第三通			卷八第六話
<p>抑園城寺長吏法務大僧正公胤上人御法事のため、唱導したまう時、其夜夢告、云く、「源空本地身大勢至菩薩、衆生教化故来此界度生」云々、或また善導再誕と伝う、(後略)</p> <p>源空亦如彼善星以謗法故墮無間所化衆不知此義教以源空號一切智人或云勢至菩薩或善導化身為壞彼惡邪心故</p> <p>法然聖人幼少而昇天台山(中略)或号勢至之化身或仰善導之再誕</p> <p>(前略)さて、常陸の下妻と申し候ふところに、さかいの郷と申すところに候ひしとき、夢をみて候ひしやうは、堂供養かとおぼえて、東向きに御堂はたちて候ふに、しんがくとおぼえて、御堂のまへにはたてあかししろく候ふに、たてあかしの西に、御堂のまへに、鳥居のやうなるによこさまにわたりたるものに、仏を掛けまゐらせて候ふが、一体はただ仏の御顔にてはわたらせたまはで、ただひかりのま中、仏の頭光のやうにて、まさしき御かたちはみえさせたまはず、ただひかりばかりにてわたらせたまふ。いま一体はまさしき仏の御顔にてわたらせたまひ候ひしかば、「これはなに仏にてわたらせたまふぞ」と申し候へば、申す人はなに人とおぼえず、「あのひかりばかりにてわたらせたまふは、あれこそ法然上人にてわたらせたまへ。勢至菩薩にてわたらせたまふぞかし」と申せば、「さてまた、いま一体は」と申せば、「あれは観音にてわたらせたまふぞかし。あれこそ善信の御房(親鸞)よ」と申すとおぼえて、うちおどろきて候ひしにこそ、夢にて候ひけりとは思ひて候ひしか。さは候へども、さやうのことをば人にも申さぬ</p>			
浄真聖一七	浄全八―八三九	浄全八―八二二	法伝全九八七

新出の独尊勢至菩薩像について(植村 拓哉)

二六	二五	二四	二三	二二	
正安三 (一二三〇一)	一三世紀後半か (一二六二—一二二九六?)	弘安五 (一二八二)頃か	弘安五 (一二八二)頃か	文永一二 (一二七五)	
覚如宗昭 (一二七〇—一三五二)	撰者不詳	了慧道光 (一二四三—一三三〇)	了慧道光 (一二四三—一三三〇)	了慧道光 (一二四三—一三三〇)	
拾遺古徳伝絵 (古徳伝)	法然聖人絵(弘願本)	知恩伝	知恩伝	黒谷上人語燈録 (和語灯録)	
卷四第二段	卷二	下巻	上巻序文	卷十一序	
<p>(前略)座主僧正これを聞て始めには問難をいたすといえども、後には嘉納信伏のいろふかくして、かつて疑殆の一言におよばず、いくちとさだめたる本生房も啞然としてものいわず、みな人感情を動し帰敬いたすほか他無し、その形容にむ</p>	<p>建久七年正月十五日より、東山靈山にて如法念仏三七日ありけり、其間の種々の不思議おとし、(中略)第五の夜勢至菩薩同く行道し給、(後略)</p>	<p>当上人往生前後諸人感夢事(中略)之を以て之に謂く、上人は西土弥陀垂迹也、又彼仏化身応神天王靈魂なり、大菩薩御正体を指し、法然上人を示す、之夢その謂れありか、(後略)</p>	<p>(前略)凡唐朝善導和尚は弥陀化身と爲し、浄土一宗を立、専ら他力往生を勧める、(中略)今、源空聖人即ち彼の善導和尚後身なり(勢至菩薩再誕也如何、(後略)</p>	<p>中比黒谷の上人勢至菩薩の化身として</p>	<p>ときき候ひしうへ、尼(恵信尼)がさやうのこと申し候ふらんはげにげにしく人も思ふまじく候へば、てんせい人にも申さで、上人(法然)の御事ばかりをば、殿に申して候ひしかば、「夢にはしなわいあまたあるなかに、これぞ実夢にてある。上人をば、所々に勢至菩薩の化身と夢にもみまゐらすことあまたありと申すうへ、勢至菩薩は智慧のかぎりにて、しかしながら光にてわたらせたまふ」と候ひかども、心ばかりはそののちうちまかせては思ひまゐらせず候ひしなり。(後略)</p>
法伝全六一〇	法伝全五三〇	法伝全七六一	法伝全七三六	浄全九—四六八	

二九	二八	二七	
正安三 (二三〇二)	正安三 (二三〇二)	正安三 (二三〇二)	
覚如宗昭 (一一七〇—一三五一)	覚如宗昭 (一一七〇—一三五一)	覚如宗昭 (一一七〇—一三五一)	
拾遺古徳伝絵 (古徳伝)	拾遺古徳伝絵 (古徳伝)	拾遺古徳伝絵 (古徳伝)	
卷九第一段	卷六第十段	卷五第二段	
<p>かえば、源空聖人智恵高妙也、その述義をきけば弥陀如来応現したまうかとおぼゆ、(後略)</p> <p>霊山にして三七日間不断念仏勤行あり、其間灯明いまだかけざるほどに、光明忽然として堂中を照耀することあり、また第五の夜、各行道のうしろに大勢菩薩、諸共に行道したまう、或人これを拝す、聖人にかくとしめす、さること侍るらんと答たまう、これよりして粗大勢至の化身ということを知ぬ</p> <p>(前略)唐家には導和尚、和国には空聖人、それ浄土宗の元祖也、凡聖人在世の間、諸人霊夢これおとし、或人は、聖人釈迦如来也とみる、或人は聖人弥陀如来也とみる、或人は善導大師也とみる、或人は聖人道綽禪師なりとみる、或人は善導大師也とみる、或人は聖人なる赤蓮華に坐して念仏したまうとみる、或人は天童四人、聖人を圍繞して管絃遊戲したまうとみる、或人は聖人の吉水の禪房をみれば、瑠璃の地にしてすきとおり、瑠璃の橋をわたせりとみる、(後略)</p> <p>(前略)聖人誕生の今、両の幃くだる、尤その表示あるか、彼大菩薩の本地を行教和尚みたてまつらんと祈請ありしかば、袂の上に阿弥陀如来うつりたまいき、然者彼をもてこれを思に、聖人弥陀如来の応跡ということ明也、(中略)然後、建保四年丙子四月二十六日の夜、聖人公胤に告たまう無想に云、「往生之業中 一日六時剋 一心不乱念 功驗最第一 六時称名者 往生必決定 雑善不決定 専修決定業 源空為孝養 公胤能說法 歡喜不可尽 臨終先迎接 源空本地身 大勢至菩薩 衆生為化故 来此界度々」(後略)</p>	<p>法伝全六二七</p>	<p>法伝全六一五—一六一六</p>	
法伝全六四一			

新出の独尊勢至菩薩像について(植村 拓哉)

三三	三二	三一	三〇
正和元年 (一二三二二)頃か	正和元年 (一二三二二)頃か	正和元年 (一二三二二)頃か	正和元年 (一二三二二)頃か
撰者不詳	撰者不詳	撰者不詳	撰者不詳
法然上人伝記 (九卷伝)	法然上人伝記 (九卷伝)	法然上人伝記 (九卷伝)	法然上人伝記 (九卷伝)
巻第五下	巻第三下	巻第二下	巻第一
<p>善導和尚、弥陀の化身として、本願の名号をひろめ、我朝には法然上人、勢至の来現として、他力の往生をすすめ給えり、</p> <p>頭真座主人論談事 (中略)全く其法器の受用をさまたげんとはあらずとの給いければ、座主より始て満座の衆みな信伏して、一人として疑なし、碩徳達褒美して云、形を見れば源空上人、まことには弥陀如来の応垂歟と、(後略)</p> <p>靈山寺念仏事 靈山寺にて、上人三七日不断念仏の間、燈火なくして光明あり、第五の夜、各々行道し給に勢至ぼさつ同く列に立給える事を信空上人夢のごとくに押し奉りて、聖人に此由を申に、さる事侍らんと答給う、余人はさらに拝する事なし、或時上人念仏してましましけるに勢至菩薩来現し給えり、(中略)仍此聖容は、一丈六尺に示給けるを、白氎一鋪にうつしとどめ奉りて永き世の本尊にしたてまつるこれ眼前の降臨也、さらに夢幻にあらず、</p> <p>「若念仏者、当知此人、是人中芬陀利花、觀世音菩薩、大勢至菩薩、為其勝友、当坐道場、生諸仏家」の文にたがう事なし</p> <p>頭光出現事 同年乙丑四月五日、上人月輪殿に参じて念仏の法門御談義数刻の後、退出し給し時、地の上よりたかく蓮華をふみてあゆみ、金色頭光赫奕として、形貌は大勢至菩薩也、禪定殿庭上にくづれおりさせ給て、御額を地に付ておがみたまつらせ給えば上人也、門外まで見送り給うに又大勢至也、敢て譬に物なし、暫ありて肅然としておどろきおきさせ給いて仰れて云、聖人の頭上に金色の円光顯現せり、(後略)</p>			
浄全一七一―一八二 法伝全四一二	法伝全三七―一三七二	法伝全三五三―三五五	浄全一七一―九七

三七	三六	三五	三四
成立年次未詳	成立年次未詳	正和元年 (一三二二)頃か	正和元年 (一三二二)頃か
撰者不詳	撰者不詳	撰者不詳	撰者不詳
黒谷上人絵詞抜 書(近衛本)	黒谷上人絵詞抜 書(近衛本)	法然上人伝記 (九卷伝)	法然上人伝記 (九卷伝)
巻上	巻上序	巻第八下	巻第七下
一 所生の小児字を勢至と号す、(後略)	(前略)唐朝の善導和尚弥陀の化身として 独り本願の深意を顕わし、我朝の法然上 人勢至の応現として専ら称名の要行を弘 め給う(中略)一 所生の小児字を勢至と 号す。(後略)	公胤僧正往生事 上人往生の後五ヶ年を送りて、建保四年 丙子四月二六日の夜、公胤僧正の夢に上 人告曰、「往生之業中、一日六時刻、一 心不乱心、功験最第一、六時称名者、往 生必決定、雑善不決定、専修定善業、源 空為孝養、公胤能説法、感喜不可尽、臨 終先來迎、源空本地身、大勢至菩薩、衆 生為化故、來此界度度、	又上人在世の間、諸人の霊夢これおし、 詮をとりて是をいわば、或人の夢には上 人釈迦如來と見る、或人の夢には上人と 真如堂の弥陀とは、一体分身也とみる、 或人の夢には大勢至菩薩也と見る。或人 の夢には、阿弥陀の右脇に坐し給える人 也と見る、或人の夢には道綽禪師也と見 る、或人の夢には善導和尚也と見る、或 人の夢には、上人なる赤蓮華に坐して 念仏し給うと見る。或人の夢には武者洛 中に充滿して、鬪争堅固也といえども、 上人住房には此事なし、是則念仏するゆ え也とみる。或人の夢には上人住房を見 れば、瑠璃をもてつくりて照耀すきとお りて、即瑠璃の橋をわたせると見る、凡 此夢ども言語のおよぶ所に非ず、此外在 世といひ、滅後といひ、霊夢を感じるひ と勝計すべからずといえども、しげきに よりて具には載せず、(後略)
法伝全三二〇	法伝全三一九	浄全一七一―二二二 二・二二三 法伝全四四八	浄全一七一―二二六 法伝全四四三

新出の独尊勢至菩薩像について(植村 拓哉)

	四一	四〇	三九	三八
	元応二―正中一 (一三三〇―二四) 頃か	元応二―正中一 (一三三〇―二四) 頃か	元応二―正中一 (一三三〇―二四) 頃か	元応二―正中一 (一三三〇―二四) 頃か
	舜昌 (一二五五―一三三五)	舜昌 (一二五五―一三三五)	舜昌 (一二五五―一三三五)	舜昌 (一二五五―一三三五)
	法然上人行状絵 図(四十八巻伝)	法然上人行状絵 図(四十八巻伝)	法然上人行状絵 図(四十八巻伝)	法然上人行状絵 図(四十八巻伝)
	卷八第七段	卷八第四段	卷一第三段	卷一第一段
左衛門の志藤原宗貞ならびに妻室惟宗の氏女、夫婦心をひとつにして、堂舎建立	<p>唐朝の善導和尚、弥陀の化身として、ひとり本願の深意をあらわし、我朝の法然上人、勢至の応現として、もはら称名の要行をひろめ給う、和漢国ことなれども化導一致にして、(後略)</p> <p>所生の小児、字を勢至と号す、</p> <p>ところどころに別時念仏を修し、不斷の称名をつとむること、みなもと上人の在世よりおこれり、そのなかに、上人元久二年正月一日より、靈山寺にして三七日の別時念仏をはじめ給うに、灯なくて光明あり、第五夜にいたりて行道するに、勢至菩薩同じく烈にたちて行道し給けり、法蓮房ゆめのごとくにこれを拝す、上人にこのよしを申に、「さること侍らん」と答たまう、余人は更に拝せず、</p> <p>(前略)「我本因地以念仏心入無生忍今於此界撰念仏人歸於淨土 十二月十一日源空 勝法御房」とかきて授けられければ、是を彼真影に押て帰敬しけり、これは首楞嚴經の勢至円通の文なり、上人は勢至の応現たりという事、世挙てこれを称す、しかるにおおくの文の中に、勢至の御詞を自賛に用られ侍る、まことに奇特の事也(中略)又讃州生福寺にすみ給し時は、勢至菩薩の像を自作して、「法然本地身、大勢至菩薩、為度衆生故、顕置此道場」(等)、置文に載られける、委事は彼配所の巻にしるすもの也、勢至の垂迹たる条、その証拠かくのごとし、尤仰信するにたれり、</p>			
	法伝全三七・三八	法伝全三五	法伝全三	法伝全三

四三	四二
元応二―正中一 (二三三〇―二四) 頃か	元応二―正中一 (二三三〇―二四) 頃か
舜昌 (一二二五五―一三三五)	舜昌 (一二二五五―一三三五)
法然上人行状絵 図(四十八巻伝)	法然上人行状絵 図(四十八巻伝)
卷十四第二 段	卷十三第六 段
<p>其後八ヶ年の歳暦をすぎて、寿永二年九月に日吉の御幸のとき、座主明雲の賞をゆづりて、法印に叙せらるるといへども、(中略)文治二年秋のころ、上人太原へわたり給う、(中略)法蔵の因行より弥陀の果徳にいたるまで、理をきわめ詞をつくしおわりて、「ただしこれ涯分の自証をのぶるばかりなり、またく上機の解行をさまたげんとはあらず」との給ければ、法印よりはじめて満座の衆、みな信伏し</p>	<p>の発願をなし、雲居寺の北ひがしのつらに其地をしめ、建仁元年四月十九日に上棟、同二年春の比、其功すでに終にけり、本尊は阿弥陀の像、脇士は観音地蔵を安置したてまつる、同年秋のころ、上人吉水の御房より、雲居寺の勝応弥陀院へ百日参詣し給しとき、願主宗貞門前に蹲居して、堂舎建立の旨趣をのべ、御供養あるべきよしをのぞみ申ければ、上人堂内に入給て、仏像安置の体を御覧ぜられ、「この堂は源空が供養すべき堂にあらざ」とて出られにけり、願主其ころをえずして周章するところに、或人申云、「聖人は勢至菩薩の垂跡にましますという事、人口あまねし、しかるに脇士に勢至菩薩のましまさざる事、上人の御意に違するか」と申ければ、いそぎ又勢至菩薩を造立し、もとの地蔵をば異所にわたしたてまつり、其跡に勢至菩薩をすえたてまつりて後、上人また雲居寺へ御参詣のとき、建仁二年八月晦日、かさねて案内を申ところに、相違なく供養をとげられにけり、ただ念仏千反をとなえたまいやがて不断念仏を始行せられ、寺号を引撰寺とつけらる。この堂いまにあり、勢至菩薩のうしろにすえたてまつる地蔵これなり、</p>
法伝全六二・六三	法伝全五九

新出の独尊勢至菩薩像について(植村 拓哉)

四六	四五	四四	
成立年次未詳 (一四C以降か)	元応二―正中一 (一三三〇―一二四) 頃か	元応二―正中一 (一三三〇―一二四) 頃か	
持阿良心 (一二六二―一三二三)	舜昌 (一二五五―一三三五)	舜昌 (一二五五―一三三五)	
選択決疑抄見聞	法然上人行状絵 図(四十八巻伝)	法然上人行状絵 図(四十八巻伝)	
下巻	卷三十五第 五段	卷三十五第 二段	
今云集の奥に云、善導は是弥陀の化身なり、この書は弥陀の直説なりと云うべし(中略)上人は是三昧発得の師なり、況や世挙つて勢至の化現と云う、また善導の再誕と号す、	直聖房という僧ありき、上人のでしとなりて一向専念の行を修す、(中略)かの僧の夢に、「臨終すでにちかづけり、下向しかるべからず」としめし給いければ、「法然上人の御事あまりにおぼつかなく候えば、早く下向してうけたまわりたく候」と申ければ、「かの上人は勢至菩薩の化現なり、不審すべからず」と、重ねてしめしおおせらるとみて夢さめぬ、其後いくほどをへずして、臨終正念にして往生をとげにけり、	讃岐国子松庄におちつき給にけり、当庄の内生福寺という寺に住して、無常のこゝとわたりをとき、念仏の行をすすめ給ければ、当国近国の男女貴賤、化導にしたがうもの市のごとし、(中略)かの寺の本尊、もとは阿弥陀一尊にておわしましけるを、在国のあいだ脇土をつくりくわえられけるうち、勢至をば上人みずからつくり給て、「法然本地身、大勢至菩薩、為度衆生故、顕置此道場、我毎日影向、擁護帰依衆、必引導極楽、若我此願念、不令成就者、永不取正覚」とぞかきおかれる、勢至の化身として、みずからそのたいをあらわしなりのり申されける、まことにいみじくとうときことにてぞ侍ける、	にけり、かたちをみれば源空上人、まことには弥陀如来の応現かとぞ感嘆しあえりける
浄全七―七〇六	法伝全三三五	法伝全三三三	

五一	五〇	四九	四八	四七
成立年次未詳	成立年次未詳 (一五世紀頃か)	成立年次未詳 (一五世紀頃か)	明徳四 (一二三九三)	成立年次未詳 (一四〇以降か)
聖聰 (一三六六—一四四〇)	聖聰 (一三五六一—一四四〇)	聖聰 (一三五六—一四四〇)	聖岡 (一三四一—一四二〇)	覚如宗昭 (一二七〇—一三五二)か
大原談義聞書鈔 見聞	当麻曼陀羅疏	当麻曼陀羅疏	決疑鈔直牒	選撰集肝要義
	卷第四十六	卷第二十二	卷第三	卷之上
首楞嚴經(注乃至)可思合也等者伝云上人弟子勝法房書絵人也奉写上人真影所望於其銘上人此見鏡二面持左右手被於水鏡置前見合頂前後所違塗胡粉直後是似賜勝法房銘事者不及返答勝法房參後日申出ヤカテ「我本因地以念佛心入無生忍今於此界撰念仏人歸於浄土」(云云)十二月十一日源空勝法御房書被授押此真影帰敬被申此首楞嚴之勢至円通文也上人為勢至	其中或老僧云此事実夢也承聞上人勢至菩薩化身御座	四源空上人勢至化身事(中略)本朝高祖源空上人此菩薩化身弘念仏令衆生帰浄土也上人本地知勢至菩薩四歳之時勢至勢至名乘父喜令蒙勢至丸名称五十四歳之時於大原龍禪寺浄土法門講談之時発起顯真和尚忻喜余取香爐行道念仏上人同行道或人見之上人行道即勢至菩薩次又於靈山寺三七日不斷念仏時時行道上人即現勢至菩薩形行道念仏人無疑勢至菩薩化身御座之由治定後知恩院所住時勝宝房自書上人御影御前持參御自筆賛請上人取筆書我本因地文而彼御影勝宝所書形不似源空被仰自取鏡御影所處被直今号鏡御影是也以此影賛文勢至菩薩化身之条無疑者也後於栗生光明寺正有御自筆御影彼又書御自筆賛此時在様顯本源空本地身大勢至菩薩書中中無疑御事也(後略)	況拳世云勢至化現亦号善導再誕本地利生弥有憑者歟	選撰集と云は勢至菩薩の垂迹法然聖人阿弥陀如来の御使いとして長承二年に日域に誕生し建暦二年に御入滅
浄全一四—七八 八・七八九	浄全一三—六九二	浄全一三—五五八	浄全七—四九七	浄全八—四六〇

新出の独尊勢至菩薩像について(植村 拓哉)

五五	五四	五三	五二	
か 一五C～一六C頃	か 一五C～一六C頃	か 一五C～一六C頃	成立年次未詳	
撰者不詳	撰者不詳	撰者不詳	聖聰 (一三六六—一四四〇)	
法然上人伝(十卷伝)	法然上人伝(十卷伝)	法然上人伝(十卷伝)	大原談義聞書鈔 見聞	
巻第二	巻第一	巻第一		
<p> 一、叡空聖人臨終事 (中略)法然上人向い奉り、三度作礼言く「源空本地身帰命大勢至」云々、而後涙流て言く、叡空王宮に至閻魔王、床を下て日本国大勢至菩薩御生誕なる、源空の本師叡空を拝せんとて、三度礼敬、而る </p>				
浄全一七一—三〇五	浄全一七一—二九〇・二九一 法伝全六五一	浄全一七一—二八六 法伝全六四七	浄全一四—七八九	<p> 彼上人勢至菩薩化現不審スヘカラスト (前略)漢家善導和尚弥陀化身、本願称名を弘め、我朝法然聖人、勢至来現として往生勸化し給う、然則濁世導師として但信称名行を授す、如来使者として出離解脱教を述時機相応往生を得る(中略)以て智恵第一の法然得大勢至化身也と </p> <p> 一、幼稚異相事 保延元年(乙卯)天下に飢饉疫病の災有り(中略)我子勢至菩薩化現と也知て得たり </p> <p> 応現是世挙称然多文中勢至御詞被用自贊侍真奇特事也今彼奉拜於真影塗胡粉被直所多是依為末代之龜鏡写彼御自筆本今流布世仍寄本云鏡御影也又或人写真影御銘申書此文賜彼正本伝在今申侍又住讃州生福寺時勢至菩薩像自作法然本地身大勢至菩薩為度衆生故顯置此道場等置文被載委事註彼配所卷者也為勢至垂迹之条其証如此足最仰信(已上)此外上人正在勢至菩薩事処奇特多之四歳時乳母奉昇盤上打手抑何在仏菩薩名乗給申セシカハ勢至勢至言依之得勢至丸之名称又見中心抄或勢至行道(如上)或時勢至菩薩現大身伝云或時上人在念仏勢至菩薩有來現其長一丈余也命画工写止於其相永仰於本尊申サレケリ </p>

	五九	五八	五七	五六	
	か一五C～一六C頃	か一五C～一六C頃	か一五C～一六C頃	か一五C～一六C頃	
	撰者不詳	撰者不詳	撰者不詳	撰者不詳	
	法然上人伝(十卷伝)	法然上人伝(十卷伝)	法然上人伝(十卷伝)	法然上人伝(十卷伝)	
	巻第十	巻第七	巻第七	巻第五	
	<p>一、公胤僧正往生事 上人往生事五箇年経、建保四年[△]丙[△]子[△]四月二十六日夜公胤僧正夢上人告云、往生之業中一心不乱念功験最第一六時称名者、往生必決定難善不決定、専修定善業、源空為孝養公胤能說法感喜不可尽臨終必来迎、「源空本地身大勢至菩薩衆生教化故来此界度々」、(後略)</p> <p>(前略)これひとえに聖人勸化の不可思議なるゆえなり、されば聖人をば善導の来</p>				
	浄全一七一―三七二 法伝全七三〇	浄全一七一―三四七 法伝全七〇六	浄全一七一―三四一 法伝全七〇〇・七〇一	浄全一七一―三三一 法伝全六九一	<p>間法然御房を叡空は大勢至菩薩御生誕知り奉らず、(後略)</p> <p>一、羅城門礎石事 (中略)此時上人退出給大勢至菩薩と成り、地上三尺計り虚空を歩み給月輪殿驚庭上拝し給えば本の上人ナリ門を出給う時又大勢至菩薩也</p>

新出の独尊勢至菩薩像について(植村 拓哉)

六〇	六一	六二	六三
成立年次不詳 (室町古写本)	成立年次未詳	成立年次未詳	成立年次未詳
撰者不詳 伝隆寛 (一一四七―一二二七)	撰者不明 伝聖寛 (一一六七―一二三五)	撰者不明 伝聖寛 (一一六七―一二三五)	撰者不詳 伝聖寛 (一一六七―一二三五)
法然上人秘伝	大原談義聞書鈔	大原談義聞書鈔	黒谷源空上人伝 (十六門記)
下巻			
化ともいい、あるいは勢至の応現ともいいあるいは弥陀の応現ともいう、まことにただ人におわします、かるがゆえに在世のむかしより歿後のいまにいたるまで化導のさかりなること、聖人の徳業にしくはなし、あうぐべく、信ずるべし、建久三年於靈山三七日不断念仏間雖無灯明有光明第五日之夜各行道交勢至菩薩同列立或人如夢拜之上人此由被申然事侍覽有返答 或人夢見勢至菩薩行道夢覺驚奉見即上人行道也如是見三度又灯消無火道場明如炬灯遙久燃火是又不思議光明也首楞嚴經勢至章云我本因地以念仏心入無生忍今於此界撰念仏人歸於浄土(云云)此文可思合也源空上人生年五十四歳	第十勸進念仏往生門 (中略)第五の夜にいたりて、行道するに、勢至菩薩同列に交立給けり、時衆夢のごとく幽に此を拝して、上人にこのよしを申に、爾ることも侍らんと答え給う、謹で此瑞相を讃嘆するに、且二種あり、一には観念法門に、観經下文の如し、若し人有て至心に常に阿弥陀仏及び二菩薩を念じ、観音勢至常に行人に与し、勝友知識と作し、随逐影護し給うといえり、勢至菩薩道場に影現し給こと、深経釈に叶えり、誰が疑心を懷かんや、二には上人は勢至菩薩の垂迹なりと云こと世挙てこれを称す、時衆等、念仏勇猛にして、罪障微薄なれば、弥信心をまし、勇猛に勤行せしめんが為に、聖力加祐して、幽に本身を見し給うか、(後略)	第十二頭光現顯本地門 元久二年乙丑四月一日に、上人月輪殿に	
法伝全八一四	浄全一四―七六八	浄全一四―七六九	浄全一七―一二・一三

六四	成立年次未詳	撰者不詳 伝聖覚 (一一六七—一二三五)	黒谷源空上人伝 (十六門記)	して念仏讃嘆の後、退出し給う時、禪定殿下庭上に走降て、五体を地に投じて、上人を礼拝し、良久ありて起させ給て、上人の頭の上に、金光顕現して光映徹し、中に一の宝瓶ありつると仰せられて、御涙にむせび給う、爾時始て、上人は勢至菩薩の化身なりと知れり、(後略)	浄全一七一—一四
六五	寛永一七(一六四〇)	真遼 (一五九六—一六五九)	念仏選撰評	源空既是勢至菩薩之応化也	浄全八—六〇六
六六	承応二 (一六五三)	撰者不詳 伝存覚 (一二九〇—一三七三)	正源明義抄	第二 叡空往生事 おなじき三年二月に叡空御病床したまう、(中略)兩三日をへてすでに荼毘したてまつらんとするとき、叡空御棺のなかよりこの棺の蓋をひらけと仰せいださる、各おどろきさわざあわて、空信学秀御棺をひらきければ棺の中よりみづからおきたまい、御手をひかれいでさせたまひ源空にむかい、坐具をのべ三礼をなし、「源空本地身帰命大勢至化度衆生故於娑婆出現」と三度となえたまひてのち、涙をながしのたまひけるは、法然房を琰魔王官に御沙汰ありつるをききて、今こそ存じたれ、われ未定してありつるところに、琰魔王来現して大日本国の源空の本師、叡空に拝せさせんとて、誦していわく、「源空本地身大勢至菩薩衆生為利益度々出現故」と誦してさりにき、かかる薩埵の化身を打擲しつる罪障を、懺悔せんがために、又蘇生するなりとて硯と髪をめしよせて、(後略)	法伝全八四—
六七	承応二 (一六五三)	撰者不詳 伝存覚 (一二九〇—一三七三)	正源明義抄	第八 無品親王参 附たり後白河法皇御一周忌の事 同じき日無品親王法然上人を善知識として御往生あり、種々の奇瑞耳目をおどろかしけり	法伝全八六三・八六四

新出の独尊勢至菩薩像について(植村 拓哉)

六九	六八	
成立年次未詳 (二七世紀頃か)	寛文二二 (一六七二)	
往誉無鉉 (?—一六四〇)	懐音 (?—一七一三)	
大原談義纂述抄	諸家念仏集	
巻下	巻之八	
<p>首楞嚴經等者上人弟子房者善絵因茲図上人真影請其賛於上人上見此画図以二面鏡自照頭面項背左右以直真影其後書賛其賛文云我本因地以念仏心入無生忍今於此界摂念仏人帰於浄土</p>	<p>(前略)高祖勢至応跡(後略)</p> <p>建久四年九月靈山平松の御房において後白河の法皇御一周忌のために七日御別行あり、結番衆二十三人なり、第五夜の寅の刻に上人ただ御一行行道しおわします、嵐はげしく吹きたりて正面の障子を吹たおし両灯をふきけし暗夜に灯びなきに道場に光明あり、ひるのごとし、慈円僧正ふしぎにおぼえて道場のうちらみめぐらし給へば、人々の色みな金色なり、さて上人を見まいらすれば御後に金色の円光たちたまえり、右の御脇に生身の大勢至菩薩たちそい給えり、上人行道したまえば板の上一尺ばかり高き中をふみたまえり、御足のしたには八葉の青蓮華をふみたまえり、念仏の御音にしたがいて御口より光明いづ、慈円僧正月輪殿上人を拝し給いて、涙をながし五体をちになげて礼したてまつる、秋兼の三位入道観仏こえあげ涙を流し「帰命稽首大勢至菩薩三身薩埵法然上人生々値遇頂戴」ととなうれば、二十三人の結衆も同音にかくのごとし、上人といたまわく、月輪殿申し給く、上人はおがませ給や否、右の御脇に生身の勢至たちそいて行道しおわします、(中略)観音勢至はともとなり給に勢至ばかりそいて観音のそいたまわざるは思いがたし、(後略)</p>	<p>浄全一五—七七三</p>
浄全一四—八二六		

七〇	七	七二	七三
元禄一六 (一七〇三)	元禄一六 (一七〇三)	元禄一六 (一七〇三)	元禄一六 (一七〇三)
義山 (一六四八—一七一七) 円智 (生没年不明)	義山 (一六四八—一七一七) 円智 (生没年不明)	義山 (一六四八—一七一七) 円智 (生没年不明)	義山 (一六四八—一七一七) 円智 (生没年不明)
圓光大師行狀画 図翼賛	圓光大師行狀画 図翼賛	圓光大師行狀画 図翼賛	圓光大師行狀画 図翼賛
卷一	卷一	卷一	卷五
唐朝の善導和尚、弥陀の化身として、ひとり本願の深意をあらわし、我朝の法然上人、勢至の応現として、もはら称名の要行をひろめたまう	第八卷ノ鏡ノ影像ノ段第三十五卷ノ終ナトニ具ニ誠説アリ諸家ノ伝記多クハ大師ハ勢至ノ応現ナリト云ヘリ古今著聞ニ源空上人ハ直人ニハオハセサリケリ勢至菩薩ノ化身トモ申ス其証明也トテ建保四年四月廿六日ノ夜公胤僧正ノ夢ニ見侍ケル上人ノ御告トシテ五言十六句ノ偈ノ中ニ源空本地身大勢至菩薩ト云句ヲ引テ勢至菩薩ノ化身ト云事是ヨリ符合スル所ナリト記サレタリ此義ハ九卷傳ニモ載ラレタリ一説ニハ弥陀ノ化身トモ云事第十二卷ニ注ガ如シ	所生の小児、字を勢至丸と号す、(中略)本朝ニハ子生テ始テ名ツクルヲ字ト云ヘリ、勢至ハ觀經ニ以智恵光等稟性智恵賢キ故ニ勢至ト名ク、觀覺ノ状ニモ進上申文殊像一体ナトイヘルモ俊逸ナルニ依レル歟、又十卷伝ニ時国或時夢ニ浄衣ヲ著タル人告云、津州葦原觀音誕生処作州南条稻岡勢至出胎砌ト云畢去ケルヲ、夢心ニ君ハ誰人ソヤト問ケレハ我是所地主高峯權現也ト答給キ、而來我子ハ勢至ノ化現也(後略)	タカヒニ知トハ上人亦智恵光勢至ノ応現ナリサレハ二師ノ本迹内鑑冷然ナルヘシトソ
浄全一六一〇四	浄全一六一〇五	浄全一六一一二	浄全一六一五八

新出の独尊勢至菩薩像について(植村 拓哉)

七七	七六	七五	七四
元禄一六 (一七〇三)	元禄一六 (一七〇三)	元禄一六 (一七〇三)	元禄一六 (一七〇三)
義山 (一六四八—一七 一七) 円智 (生没年不明)	義山 (一六四八—一七 一七) 円智 (生没年不明)	義山 (一六四八—一七 一七) 円智 (生没年不明)	義山 (一六四八—一七 一七) 円智 (生没年不明)
圓光大師行状画 図翼賛	圓光大師行状画 図翼賛	圓光大師行状画 図翼賛	圓光大師行状画 図翼賛
卷十三	卷八	卷八	卷八
<p>灯なくして光明あり、第五夜にいたりて、行道するに、勢至菩薩、おなしく列にたちて、行道し給けり、法蓮房夢の如くに、これを拝す、上人に、このよしを申に、さる事侍らんと答給、余人はさらに拝せず、</p> <p>上人の弟子勝法房は、絵を描く仁なりけるが、(中略)これは首楞嚴經の勢至円通の文なり、上人は勢至の応現たりと云う事、世挙てこれを称す、しかるに、多くの文の中に、勢至の御詞を、自賛に用いられ侍る、まことに奇特の事なり、(中略)勢至の御詞首楞嚴經第五卷に出たり</p> <p>又讃州生福寺に、住み給し時は、勢至菩薩の像を、自作して、「法然本地身、大勢至菩薩、為度衆生故、顕置此道場」、等置文にぞ載せられける、委事は、彼配所の巻に、しるすもの也、勢至の垂迹たる条、その証処かくのごとし、尤仰信するにたれり</p> <p>左衛門志藤原宗貞、並びに妻室惟宗の氏女、夫婦心を一にして、堂舎建立の発願をなし、雲居寺の北東の頬に其地をしめ、建仁元年四月十九日に上棟し、同二年春の比其功すでに終にけり、本尊は阿弥陀の像、脇土は観音地藏を安置したてまつる、上人吉水の御房より、雲居寺勝應弥陀院へ百日参詣し給し時、願主宗貞門前に蹲居して、堂舎建立の旨趣をのべご供養あるべき由を望申ければ、上人堂内に入給て、仏像安置の体を御覽せられ、この堂は源空が供養すべき堂にあらずとて出られにけり、願主その心を得ずして、周章するところに、或人申て云、上人は勢至菩薩の垂迹にましますと云こと人口あまねし、しかるに脇土に勢至菩薩のま</p>			
浄全一六一—二三〇	浄全一六一—一八七	浄全一六一—一八六・一八七	浄全一六一—一八四

七九	七八	
元禄一六 (一七〇三)	元禄一六 (一七〇三)	
義山 (一六四八—一七 一七) 円智 (生没年不明)	義山 (一六四八—一七 一七) 円智 (生没年不明)	
圓光大師行状画 図翼賛	圓光大師行状画 図翼賛	
卷三十五	卷三十五	
直聖房という僧ありき、(中略)あるとき 熊野山にまいりたりけるに、上人の配流 せられ給よしをききて、いそぎ下向遷都 しけるににわかに重病をうけて、下向か なわざりければ、ねんごろに権現にいの り申けるに、かの僧の夢に、臨終すでに ちかづけり、下向しかるべからずとしめ	讃岐国子松庄に落ち着き給にけり、当庄 の内生福寺という寺に住して無上のこと わりをととき、念仏の行を勧め給ければ、 当国近国の男女貴賤、化導にしがたう もの市のごとし、或は邪見放逸の事業を あらため、或は自力難行の執情をすてて、 念仏帰し往生をとぐるもののおかりけり、 (中略)かの寺の本尊、ものは阿弥陀の一 尊にておはしましけるを、在国のあいだ 脇侍をつくりくわえられけるうち勢至を ば、上人みずからつくり給て、「法然本 地身大勢至菩薩、為度衆生故、顕置此道 場我毎日影向、擁護帰依衆、必引導極樂、 若我此願念不令成就者、永不取正覺」、 とぞかきおかれる、勢至の化身として、 みづからその体をあらわしなりのり申され ける、まことにいみじくたうとき事にて ぞ侍ける	しまさざること、上人の御心に違する歟 と申ければ、いそぎ又勢至菩薩を造立し、 本の地蔵をば異所に渡したてまつり、そ の跡に勢至菩薩を居たてまつりて、後上 人又雲居寺御参詣の時、建仁二年八月晦 日、かさねて案内を申処に、相違なく供 養をとげられにけり、別の御啓白なし、 ただ念仏千遍を唱えたまい、やがて不断 念仏を始行せられ、寺号を引撰寺とつけ らる、この堂いまにあり、勢至菩薩の後 ろにすえたてまつる地蔵これなり、
浄全一六一五四〇	浄全一六一五三六	

新出の独尊勢至菩薩像について(植村 拓哉)

	八一	八〇	
	元禄一六 (一七〇三)	元禄一六 (一七〇三)	
	義山 (一六四八—一七一七) 円智 (生没年不明)	義山 (一六四八—一七一七) 円智 (生没年不明)	
	圓光大師行状画 図翼賛	圓光大師行状画 図翼賛	
	卷四十九	卷四十八	
<p>右京権大夫隆信の子左京大夫信実父子ともに絵の事によりければ父の朝臣も法皇[△]後白川[△]の勅に依て上人の真影をかかれたり[△]第十卷に見えたり[△]信実朝臣又時に妙画の人なればにや似絵[△]人の影をよく写すを云也[△]を書かれたること諸記に往々なり、又隆信の娘にも妙画の人ありき、当時知恩院に安置する絵像の真影今なお現在あて坐像一尺五寸ばかり、御衣は墨御けさは胡粉にてうす彩色みな天台衣にて尋常の影像にかかわらず、面貌少し傍をみかえり給て頂に金色の五輪あり、摺写の尊像に此の御姿なるが世に流布しけるは此の写しなるにやいかなればにや五輪をば頂載しましたけん、知がたし、彼の靈山寺の別時念仏には勢至菩薩行道し給しを遊蓮房夢の如くに拝まれしなとあれば[△]第八[△]若は本地の宝瓶を載せたまうが加様に見えさせ給いけるにやさてそれを模写するならんかしとぞ人申あえり、又讃州置文の御影も五輪を載給えり(後略)</p>			
古今著聞云建保四年四月二十六日夜公胤僧正ノ夢ニ見侍ケル [△] 九卷伝同之 [△] 源空上人告曰、「往生之業中 一日六時刹	伝文に云く、又頭光の橋と云う云々、釈書に云く、空 [△] 源空 [△] 藤相国月輪に謁す、談話して出ぬ、相国庭に下し背後を拝す、左右に語、曰く、空公頭上に金円光を現す、九卷伝に頭光現して後門外まで見おくり給にまた勢至なりと	浄全一六—七〇 七・七〇八	

八七	八六	八五	八四	八三	八二
宝曆一 (二七六一)	寛延一 (二七四八)か	寛延一 (二七四八)か	正徳五―享保三 (二七一五―一八)	宝永一 (二七〇四)	元禄一六 (二七〇三)
関通 (一六九六―一七 七〇)	大玄 (一六八〇―一七 五六)	大玄 (一六八〇―一七 五六)	義山 (一六四八―一七 一七) 素中 (一六七三―一七 四三)	心阿 (生没年不明)	義山 (一六四八―一七 一七) 円智 (生没年不明)
一枚起請文梗概 聞書	浄土頌義探玄鈔	浄土頌義探玄鈔	和語燈録日講私 記	鎮流祖伝	圓光大師行状画 図翼賛
序	卷之中	卷之上	第一卷	卷第一	卷五十八
円光大師本地高妙章 (中略)即是肉身之如來也何疑勢至之權跡 (後略)	又吉水大師勢至權迹智恵第一(後略)	夫大師勢至權迹智恵第一(後略)	(前略)此の三部経を弘むる祖師自他の人 師あるとき天台浄影等の師は色色と釈し 玉へとも弥陀本願の意に叶はす此の故に 阿弥陀如來極樂に在て此を嘆き玉い、大 唐に出現して善導大師と示現し玉ひて本 願の正意三部経の正意を顯し玉ふ也又日 本にも空也恵心永觀等の祖師種種に釈し 玉へとも是も正意に叶はす此の故に勢至 菩薩日本に示現して願意を顯し玉ふ也元 祖大師歎		一本地高広 大師は得大勢之応化と為す、其証一端に 非ず、靈山之別修、無刃光身を現し、亦勝 法画師之肖像、賛を請い勢至円通之偈を 書く、復讃州生福寺に竄居、親手勢至之 像を刻、一偈を蔵、法然本地身大勢至菩 薩之句有り、又熊野大權現門人直聖を示 す、曰師勢至之化身也等、詳于伝え出る、
浄全九―一三八	浄全一二―一六八	浄全一二―一五八八	浄全九―七〇一		浄全一六―九三八

新出の独尊勢至菩薩像について(植村 拓哉)

九三	九二	九一	九〇	八九	八八
宝曆一一 (一七六二)	宝曆一一 (一七六二)	宝曆一一 (一七六二)	宝曆一一 (一七六二)	宝曆一一 (一七六二)	宝曆一一 (一七六二)
関通 (一六九六—一七 七〇)	関通 (一六九六—一七 七〇)	関通 (一六九六—一七 七〇)	関通 (一六九六—一七 七〇)	関通 (一六九六—一七 七〇)	関通 (一六九六—一七 七〇)
一枚起請文梗概 聞書	一枚起請文梗概 聞書	一枚起請文梗概 聞書	一枚起請文梗概 聞書	一枚起請文梗概 聞書	一枚起請文梗概 聞書
序	序	序	序	序	序
同三十五の巻に云く、直聖房というそ うありき上人弟子となりて、一向専修の行 を修す、(中略)法然上人の御事、(中略) か上人は、勢至菩薩の化現なり、不審 すべからずと、かさねてしめしおおせら るとみて、ゆめさめぬ、(後略)	同巻に云く、又讃州生福寺にすみ給いし 時は、勢至菩薩の像を自作して、「法然 本地身、大勢至菩薩、為度衆生故、顕置 此道場等」、置文にぞ載られける、(中 略)勢至の垂迹たる条、其証拠かくのご とし、尤仰信するにたれり、已上	同巻に云く、上人の弟子勝法房は、絵を かく仁なりけるが、(中略)これは首楞嚴 經の、勢至の円通の文なり、上人は勢至 の応現たりということ、世挙てこれを称 す、しかるにおおくの文の中に、勢至の 御詞を、自讃に用られ侍る、まことに奇 特の事なり	同巻に云く、ところどころに、別時念仏 を修し、(中略)靈山寺にして、三七日の 別時念仏をはじめ給うに灯なくして光明 あり、第五夜にいたりて、行道するに、 勢至菩薩おなじく列にたちて行道し給い けり、(後略)	同巻に云く、ところどころに、唐朝の善 導和尚弥陀の化身としてひとり本願の深 意をあらわし、我朝法然上人勢至の応現 としてもはら称名の要行をひろめ給う、 和漢ことなれども化導一致にまします、 已上、	中御門院之勅疏 勅圓光大師者勢至權跡、(中略)諡東漸号、 嘉永八年辛卯正月十八日 勅使 平松少 納言公晃書
浄全九—一四一	浄全九—一四〇・ 一四一	浄全九—一四〇	浄全九—一四〇	浄全九—一三九	浄全九—一三九

一〇〇	九九	九八	九七	九六	九五	九四
享和一一 (一八〇二)	寛政五 (一七九三)	宝暦一一 (一七六一)	宝暦一一 (一七六一)	宝暦一一 (一七六一)	宝暦一一 (一七六一)	宝暦一一 (一七六一)
金谷道人 (一七六一—一八三三)	風航了吟(一八〇)	関通 (一六九六—一七七〇)	関通 (一六九六—一七七〇)	関通 (一六九六—一七七〇)	関通 (一六九六—一七七〇)	関通 (一六九六—一七七〇)
法然上人御絵伝 略賛	新撰往生伝	一枚起請文梗概 聞書	一枚起請文梗概 聞書	一枚起請文梗概 聞書	一枚起請文梗概 聞書	一枚起請文梗概 聞書
上第三段	卷之四	上	上	序	序	序
(前略)作州稲岡は勢至出胎の砌なりと然しより我子は勢至の化身なりとて勢至丸と号すとなん(中略)勝法房が画像にも勢	(前略)即謂曰、勢至菩薩正身来現、(後略)	吾大師上人は、安養淨刹の教主、亦是勢至薩埵の権跡を示し、(後略)	抑よく円光大師は、勢至菩薩の応現として、迹を我国に垂玉ふ事は、唯淨土一宗の基を開き、本願の念佛を、末代に弘め、濁乱の凡夫を淨土に生れしむるにあり(後略)	古今著聞二之卷に云く、源空上人は、一向専修の人なり、たた人には、おはせさりけり、弥陀如来の化身とも申す、勢至菩薩の垂跡とも申すとぞ、其証あきらかなり(後略)	聖覚法印の十六門記に、本地現顕を立て云く、元久三年四月一日に、上人月輪殿にして念仏讚歎の後、退出し給う時、(中略)上人の頭の上に、金光顕現して光映徹し、中に一つの宝瓶ありつると仰せられて、御涙にむせび玉う、爾時始て上人は、勢至菩薩の化身なりと知れり	円光大師九卷伝第八の卷下に云く、上人入滅の後、五ヶ年を送りて、建保四年丙子四月二十六日の夜公胤僧正の夢に、上人のたまわく、「往生之業中 一日六時に一心不乱心 功験最第一 六時称名者 往生必決定 雑善不決定 専修定善業 源空為孝養 公胤能說法 感喜不可尽 臨終先来迎 源空本地身 大勢至菩薩 衆生為化故 来此界度度」(後略)
原	浄全一七一五六〇	浄全九一—一六六	浄全九一—一六二	浄全九一—一四三	浄全九一—一四二・一四三	浄全九一—一四二

新出の独尊勢至菩薩像について(植村 拓哉)

一〇六	一〇五	一〇四	一〇三	一〇二	一〇一	
天保八 (一八三七)	天保八 (一八三七)	天保八 (一八三七)	天保八 (一八三七)	天保八 (一八三七)	文化一五 (一八一八)	
法州 (一七六五—一八 三九)	法州 (一七六五—一八 三九)	法州 (一七六五—一八 三九)	法州 (一七六五—一八 三九)	法州 (一七六五—一八 三九)	声譽超道 (生没年不明)	
一枚起請講説	一枚起請講説	一枚起請講説	一枚起請講説	一枚起請講説	法然上人行状略 伝	
巻下	巻下	巻上	巻上	巻上	序	
<p>至円通の文を題し玉い、宗貞が御堂の脇 士に勢至なければ供養し玉わざる、高砂 十輪寺の影像には頭上に宝瓶あり讃州小 松の生福寺の勢至の像賛にも法然本地身 大勢至菩薩と自ら題し玉い、直聖房が夢 にかの上人は勢至菩薩の化現なりと(中 略)、また靈山寺別時にも勢至菩薩行道 の列に立玉いし(後略)</p> <p>唐朝の善導和尚弥陀の化身としてひとり 本願の深意をあらわし、我朝の法然上人 勢至の応現としてもはら称名の要行をひ ろめたまう</p> <p>(前略)斯く謹慎篤孝の勢観上人、大師御 遷化の砌に至りて、御遺訓の御願ありし は、何故ぞと云に、抑我元祖大師の本地 は、極楽界の右脇の大地、智恵大勢至菩 薩、此日本の衆生を化度せんために、美 作国久米の南条稲岡の庄漆間の家に垂迹 し、(後略)</p> <p>本地は弥陀の智恵を司る勢至菩薩、垂迹 し玉いては、智恵第一と称せられ給える</p> <p>弥陀如来が唐土へは、善導大師とあらわ れ、勢至菩薩は我朝へ、圓光大師と垂迹 して(後略)</p> <p>月輪は勢至の垂迹、大師も亦勢至の垂迹 なれば</p> <p>抑元祖大師の御本地を云に、二説あり、 一に弥陀如来の垂迹と云い、二には勢至 菩薩の垂迹と云う、二説あれど終成一意 なり、其故は、弥陀の智恵を司り給う勢 至なれば、弥陀を離れたる勢至無く、勢 至を離れたる弥陀も在さねば、弥陀即勢 至、勢至即弥陀にして、一体の二名なる</p>						
浄全九—三〇二・ 三〇三	浄全九—三〇〇	浄全九—二五六	浄全九—二四三	浄全九—二三六	原	

一〇七	
(明治四四 一九一一)	
知恩院編	
華頂誌要 華頂 山編	
	<p>故、弥陀の垂迹と感見して、利益ある人の為には、弥陀と感見せしめ、勢至の応現と信じて、利益ある人の為には、勢至と自称し給えるなり、しかるに今専ら勢至の応現の説によるとは、勅修御伝中、最初乳母のたづねに答えて、我は勢至と答えて給える故、勢至丸と号け奉りしより初めて、御入滅迄に其本地を顕し玉うと、度々なれば、一々爰挙盡し難し、中に於て、御弟子勝法房、大師の真影を写し、其銘を願われければ、「我本因地以念仏心入無生忍今於此界撰念仏人歸於浄土」と楞嚴經の、勢至円通の文を書し玉えり、(中略)又讃州生福寺に住し玉いし時、勢至菩薩の像を御自作ありて、「法然本地身、大勢至菩薩、為度衆生故顯置此道場」と記し玉えり、かくの如くに本地をあらわし給うは、(中略)大勢至の御指南に依て、本願念仏の安心起行を、心得たると云ものなり、(中略)元より此の菩薩は弥陀如来の智恵を司り玉う故、光明勝れ玉えば、無辺光とも申し上る、(智慧は因、光明は果)、「以智恵光普照一切、令離三塗得無上力、是故号此菩薩名大勢至」(中略)実に本迹符節を合せたる御利益ありがたき限にこそ</p>
浄全一九一一七二	

新出の独尊勢至菩薩像について(植村 拓哉)

一〇八	明治四四 (一九一二)	知恩院編	華頂誌要 華頂 山編		(前略)即是肉身如来、何疑勢至權迹、 (中略)又大師五百回忌に当り、(中略)重 ねて東漸大師の微号を賜う、勅書に曰わ く、「勅、圓光大師勢至權迹、(後略)」	浄全一九一―一七六
一〇九	明治四四 (一九一二)	知恩院編	華頂誌要 華頂 山編		一、当院再見勸進状 永正十四年 (中略)惟則上人者弥陀右脇之居士、大勢 至菩薩之応作云々、(後略)	浄全一九一―二〇六
一一〇	明治四四 (一九一二)	知恩院編	華頂誌要 華頂 山編		勢至堂 又本地堂と名く、山上大谷浄室 (大師御終焉地)の旧址に在り、梁行八 間、桁行八間半、南面、趾葺なり、後奈 良天皇享祿三年、第廿七世徳譽上人の営 建に係る、(伝え云う、青蓮院の護摩堂 を移築すと)此堂は元の御影堂にして、 慶長九年大師の影像を中段の新殿に遷す に及び、本地勢至菩薩の像(作者不詳、 藤原秀衡念持仏と云ふ)を壇上に安置し、 勢至堂と称するに至れり、(後略)	浄全一九一―二二〇
一一一	明治四〇―大正三 (一九〇七―一九 一四)頃	浅井法順編	黒谷光明寺誌要 黒谷編	第二 歴代略譜 開祖大師法然房源空上人 開祖大師 父は美作国衆野押領使漆時国、 長承二年四月七日誕生す、幼名を勢至丸 という、(中略)大師念仏薫習功つもり或 は靈夢を感じし或は三昧を發得し或は靈 相を顯現す、時人生身仏の想をなし勢至 菩薩の化現と称す、(後略)		浄全二〇―三八二
一二二	成立年次未詳	撰者不詳	法然上人恵月影	第十	(前略)念仏を唱ふ所は貴賤貧富の別ちな く、海人漁人苦屋まで皆法然が遺蹟ぞと、 仰せはげにもありがたき勢至菩薩の御再 来、実に現当のいき如来とみな一樣に礼 拝す、(中略)東下りの尻馬を又乗り直し て西の空、一世の大事と蓮生熊谷大手を 拡げ大音後略声、ヤア勢至菩薩の再来た る師の上人に仮名を附け、(後略)	法伝全九六四

〔凡例〕

・法然を勢至菩薩の化身として語るものを中心に取り上げた。但し、勢至菩薩以外との本地垂迹関係について触れるものも併せて集録した。

・適宜常用漢字に改めた。

・「成立」項では、成立年代について記し、およそ年代順に列記している。但し、成立について諸説ある場合は、左記参考文献によって現状妥当とするものに拠った。

・「著者」項では、編著者等について記し、その生没年を併せて記載することで成立年代が不明なものに関しても凡その年代が推定できるようにした。

・「内容」項では、段や節などで区切り項目を作成しているが、例えば序文などで一つの文脈として様々な内容を記している場合は、分けずに一つの項目でまとめている。

・「出典」項では、参考とした書籍名を以下のように略称している。数字は巻号及び頁数を表している。なお、「原」表記は原典を参照している。

「浄土宗全書↓浄全」

「法然上人伝全集↓浄伝全」

「浄土真宗聖典↓浄真聖」

・本一覧を作成するにあたり、以下の資料を参考とした。

『浄土宗全書』（浄土宗宗典刊行会、一九〇七―一九一四）

三田全信『成立史的法然上人諸伝の研究』（光念寺出版部、一九六六）

井川定慶『法然上人伝全集 増補再版』（一九六九）

『浄土宗大辞典』（浄土宗大辞典刊行会、一九七四―一九八二）

新出の独尊勢至菩薩像について(植村 拓哉)

中井真孝『新訂 法然上人行状絵図』(佛教大学宗教文化ミュージアム、二〇一二)
『新纂浄土宗大辞典』(浄土宗大辞典編纂実行委員会編、二〇一六)